第1部　各地域における東日本大震災

写真　（航空写真）田老地区　2011/03/28　撮影：宮古市

第1部　各地域における東日本大震災

A　田老地域

第1章　「津波太郎」―まちの復興と生活の復興

伊藤　純

はじめに

「津波太郎」という異名で知られる田老の歴史は、しばしば津波との戦いとして描かれる。明治時代以降に限っても、田老は明治29（1896）年6月15日と昭和8（1933）年3月3日に大津波による壊滅的な被害を受けている。こうした惨憺たる経験から、「津波太郎」から「防災太郎」を目指して、様々な市街地整備が進められた。なかでも「万里の長城」として全国的に知られる大防潮堤は防災機能を果たすとともに、町のシンボルとして田老の風景の一部となっていた。こうした町をあげた努力にもかかわらず、2011年3月11日に宮城県沖を震源とするマグニチュード9・0の大地震が発生し、大津波は「万里の長城」を越えて町を飲み込んだ。そして、田老の人びとは長期にわたる避難生活を余儀なくされた。

1　防災の町をめざして

明治三陸地震

明治三陸地震における田老の様子を伝える資料はわずかである。現在のところ体験記のようなものは見つかっていないが、新聞・雑誌の記事や被災に関する調査記録によって、当時の被害状況を知ることができる[注(1)]。臨時増刊「大海嘯被害録」として当時の様子を3巻にわたり特集した『風俗画報』の下巻では田老・乙部について「十五日の海嘯は水高平水より高き事七十尺に及び、五分間を費やさずして全戸数三百三十五戸は微塵となりて海岸に浚ひ出され、男女相合して老幼千八百六十七名は海底の鬼と化し畢んぬ」と報じている。生き残ったのはマグロ漁で沖合に出ていた15艘の乗組員60人と、出稼ぎの漁夫若干名。陸地で難を逃れたのはわずか36人であった。絶家は130戸にも及んだ。続く記事には「下摂待は田老村に接する十戸の小部落なり。其戸数の少なきに似ず二十七頭の牛を飼養せしが、海嘯の為め其全部落と牛の残らずとを持去られ、村民は四十三名の中十七名生存せしに過ぎず、惨又惨」とある。明治三陸地震における田老・乙部・摂待の津波被害が類を見ないほどに大きいものであったことが数字に表れている[注(2)]。また、県の三陸大海嘯被害地授産労法取調方を委嘱された山奈宗真の報告書『岩手県沿岸大海嘯取調書』では、被災後の対策として「田老川ノ南山根ニ防風林ノ松樹数十本在り（四五尺廻リ）　海面ヨリ二十尺モ高キ砂利堤防アリ　今回ノ津波ニ立木モ堤防モ破壊セラレ海面平均ノ地トナリ　将来田老海浜ニ六七間ノ堤防（汐止）ト防風林植付　尤急務ナリ　此田老川ノ床下ケ両側堤防改築モ必要」という報告がある。この記述によれば、明治三陸地震以前にも、数十の防風林と海抜およそ6㍍の砂利の堤防が築かれており、大津波を想定した町づくりがすでになされていたことが読み取れる。

昭和8年の三陸地震

昭和8年の三陸地震における田老の状況は新聞・雑誌記事のほかに、個々の体験記も多く残されている。宮古測候所所蔵資料『験震時報』第7巻には、「明治二十九年の三陸大津波に際し、釜石以北の最激被害地たりし田老村は、今回も亦沿岸に於て其惨状右に出るものなく、一世の視聴を集めたり。即ち戸数五六〇戸中山手にありし小学校役場及び寺院と少数の民家を残し、流出家屋実に五〇〇余を算し人口二七七三中死者五八四、死亡と推定される不明者三二七、負傷者一二二を出す等、其惨鼻の限りを尽せり。小職踏査中（六日）猶続々死体の発掘あり、実に鬼気迫るものありき」と、その惨状が記されている。この記事は震災から3日後の3月6日の様子である。およそ9割の家屋流出と人口の3割の命を奪う大津波が再び田老を襲ったことになる。同年5月21日の村役場の発表によると、死者・行方不明者合わせて911人、66世帯が家族全滅となっており、ここからもその惨事がわかる。この昭和三陸地震の体験記は田老町教育委員会編『田老

町史津波編（田老町津波誌）』（２００５年）にまとめられている。

防潮堤建造へ向けて

昭和三陸地震によって、大きな被害を受けた旧田老村は本格的に防潮堤建造と市街地整備に乗り出している[注(3)]。このときに集団高台移転も検討されたが、およそ５００戸の家屋を移転できる高地が見当たらなかったことや、村民のほとんどが漁業従事者であったことから、防潮堤を建造してその内側に市街地を再建することになった。村有地がなかったために耕地整備法によって、昭和８年12月には地権者の賛同を得て、耕地整理組合を組織して地権の整理を行った。所有地から２割ずつの提供をうけて、道路や防潮堤の敷地を確保し、市街地の整備を進めた。津波犠牲者が多く出た要因の一つには、未整備道路、つまり柵や垣根が妨害になって逃げ遅れてしまったことが挙げられた。そのため、国道45号線から延びる西向きの道路はすべて山に向け、直線的に避難路を整備していった。また、十字路の角を取る「隅切り」を導入し、交差点の見通しが良くなるように工夫している。町の山側を走る三陸鉄道には、登って避難できるように架橋に梯子が付けられた。市街地北部の荒谷を流れる長内川は、切り替え工事と護岸整備を進めた。同様に市街地南部を流れる田老川は、防潮堤の外側に沿って北流させて、長内川と合流させてから田老湾に注がせるように整備した。また、昭和９年には須賀の砂地を利用して、約７ヘクタールに赤松や黒松の防潮林を植栽した。避難所の整備も進められ、第一避難所を各地区に設け、さらに公共施設を集団的な避難を想定した第二避難所とした。

当初の防潮堤建造計画では、下小林より青砂里の出羽神社まで一直線に約１キロメートルを想定していたが、あまりにも大規模な工事計画であったために内務省の不認可となった。それでもなお、規模を縮小して村単独による建造を目指した。結局、防潮堤を小林から長内川橋まで縮小して、宅地造成資金として５万円を預金部から借り入れて、工事に踏み切っている。昭和10年には石黒英彦岩手県知事が復興工事の視察に田老へ立ち寄り、田老の復興に向ける熱意を受けて工事は県が行うことになった。昭和９年から建造をはじめ、昭和15年には９６０メートルまで完成していたが、アジア・太平洋戦争の激化によって工事は中止となった。昭和27（１９５２）年の十勝沖地震を契機に、関係各庁に陳情して昭和29（１９５４）年には工事を再開させ、昭和33（１９５８）年３月に高さ10メートル、長さ１千３５０メートルの巨大防潮堤がついに完成した。

第２防潮堤、第３防潮堤建造へ

防潮堤建造は第２防潮堤、第３防潮堤の増設へと続く。第２防潮堤は昭和37～40年度で中町通用門から青砂里の三王道路方面に向けて５８２メートルを築き、さらに昭和48～53年度で中町通用門から田代川水門までのびる５０１メートルの第３防潮堤を建造した。河川には水門やひ門を設け、田代川水門には遠隔操作制御装置を装備し、旧田老町役場（現・田老総合事務所）で制御できるようになった。昭和56年には防災行政無線が完成する。村役場、消防分署、漁協に無線の基地局を設け、町内の37か所に受信機付きのスピーカーを設置して、これによって全戸的に危機情報を知らせる放送網が整った。平成３（１９９１）年には東京大学地震研究所が潮位観測システムを配備し、翌年には津波観測システムが完成する。こうした津波から町を守るために策を尽くした旧田老町は、平成15年３月３日に「津波防災の町宣言」を宣言している。

次世代に伝える活動

都市整備のほかに、被災体験を次世代に伝える活動もある。先に挙げた『田老町史津波編（田老町津波誌）』といった経験談の編纂のほかに、津波体験をもとに紙芝居「つなみ」を作成して防災教育の啓発を行った田畑ヨシさんは、田老を代表する語り部として県内外に知られる。

こうした防災を目的とした町づくりの成果が目に見える形として表れたとされているのは、昭和35（１９６０）年５月24日のチリ地震である。23日にチリ沿岸で発生した大地震による津波は、22～23時間かけて太平洋沿岸に到達し、深夜に突如襲ったこの津波によって全国で１２２人が死亡した。田老では退潮と最大波高３・５メートルの津波が観測さ

れた。第1防潮堤が建造されたばかりだったが、サッパ船20隻を流失したのみで、人的被害・建物被害はなかった。NHKが「日本の素顔」という番組で、大船渡と対比しながら田老の防潮堤を紹介し、その存在が全国に知れ渡り、防災行政関係者を中心に防潮堤の視察が増加した。

防潮堤に囲まれた市街地の地区は、大平・小林・堺町・田中・田の沢・上町・中町・下町・川向・上荒谷・中荒谷・下荒谷・乙部といった地区である。これらを取り囲むように樫内や和野・水沢地区といった比較的高地の集落が点在し、自治会をそれぞれ組織している。自治会には、会長、副会長、会計、行政連絡員などの役があり、回覧板による行政連絡、清掃や共同作業、場合によっては共有財産を持つなど地域社会を支える基礎となっていた。例えば、上荒谷自治会では1990年代半ばごろまで、8月30日の晦日盆に高末民宿の駐車場で自治会主催の大規模な盆踊りを企画して、踊りやくじ引き・花火・バザー・売店をしたり、研修旅行や小正月のミズキ団子や幣束を自治会で集まって作ったりしていた。こうした社会関係は平時においても、長期的な避難生活の場面においても、共同でサポートできる関係作りの原動力になっていた。また、地域防災の基本的な単位になっており、昭和三陸地震が起こった3月3日にちなんだ避難訓練では自治会ごとに指定避難場所に避難したり、津波浸水シミュレーションを使った講習を行っていた。

注(1)『風俗画報』(臨時増刊「大海嘯被害録」)および『山奈宗真の津波被害踏査』の詳細な記事については、宮古市東日本大震災記録編集委員会編『東日本大震災宮古市の記録』第1巻(津波史編)に再録されており、本報告においてもそれを参照した。

注(2)田老町教育委員会編『田老町史津浪編(田老町津波誌)』(2005年)によれば、マグニチュード7・5、最大波高15メートル、罹災戸数836戸、死者・行方不明者1千859人、一家全滅130戸、罹災生存者36人、漁船流出540隻としている。数字は報告や記事によって若干のズレがある。

注(3)田老尋常高等小学校編『田老村津浪誌』第2編(1934年)、田老町教育委員会編『田老町史津波編(田老町津波誌)』(2005年)

2 発災直後と避難

いつか大津波が町を襲うことを想定して、市街地のハード面での整備を地域全体で取り組んだ田老であったが、東日本大震災では大津波が他と等しく町を襲い、多くの人命と財産を奪った。ここでは、田老で被災した人々の避難時の様子を聞き取り調査をもとにみていきたい。

落合ヨシさん(昭和6年生、女性、青砂里)2012年10月14日取材

3月11日の午前中は自宅にいて、午後になって地震の揺れを感じた。戸が閉まらなくなるから急いで戸を開けて、それから火を止めた。いつも病院に行く鞄を枕元に置いていたから、それだけを持って庭に出た。嫁と大学生の孫がちょうど家にいたので、一緒にそのまま青砂里の出羽神社にあがって行った。神社までは地震があってから2~3分で行ったと思う。そこに5、6人は来ていた。しばらくすると、人がたくさんやって来た。波はどっちから来たかわからなかったけれども、そこで波で人が流されているのを見た。そしたら、Yさんが、「この山ってどこさいく?」って言うので、半信半疑だったけど「このまんま行けば、越田だかどこかだかさ出っかもしれねぇから、いくべー」と誘い、そのまま歩いて行った。先に誰か何人かで歩いていた気がする。7人ぐらいのまとまりで私とYさんが先頭になって歩いて行った。

そこで和野の人たちがみんな出ていて、「待っててねー。この人たち送っていったら、また迎えさ来るから」と、車で道の駅まで送ってくれた。だけど、道の駅は「避難所ではないから駄目だ」と言われて、それでグリーンピアに行った。グリーンピアに着いたときは16時過ぎぐらいでまだ明るかったと思う。ご飯も炊くところもあったから、みんなよりも困らなくて済んだ。お寺や北高に避難した人は大変だったと思う。何日か経ったら、知り合いが町の様子を見に行ってくれて、

自分の家が流されたことを知った。だから、グリーンピアから車で送ってもらって町の様子を見てきた。

息子は宮古に仕事に行っていて、道が通れないということで田代を回ってきて北高に避難していた。3月30日にアリーナに集まったときに会えた。それまで連絡はつかなかったけれど、知り合いが息子の様子を教えてくれていた。樫内の仮設住宅に入居したのは5月末ぐらい。息子夫婦と孫の4人で住んでいる。青砂里の近所の人たちの情報はあまりわからない。

金澤純二さん（昭和22年生、男性、乙部）2012年10月15日取材

東京消防庁に5年務めて、その後、宮古地区広域行政組合消防本部で職員をしていた。退職してからは田老診療所の宿直などの仕事をしていた。生まれはもともと岩泉町で、大平の公営住宅に住んでいた。平成元年に乙部に家を建てた。津波が来てもたいしたことないだろうと建てたが、嫁の父親が反対していたのを覚えている。

地震があった日は宿直だったので、午後5時15分から働く予定だった。午前中は家にいて、夕食のお弁当を作って休んでいたら、大きな揺れを感じた。今までに経験したことがない揺れだったと思う。本棚とか食器棚とかがぐちゃぐちゃになっていた。妻が小学校の用務員をやっていて、妻が帰って来る前に片付けようと思った。家はちょっと高いところだったので、津波が来ない地域だと思っていた。津波が来たとしても家はちょっと濡れるぐらいだと思っていたので、20分～30分ぐらいは家の中にいたと思う。とりあえず、情報がほしかった。テレビは当然つかなかったので、ラジオをつけたが、トランジスタラジオは夜しか入らない地域なのでつながらなかった。車で逃げるつもりはなかったが、車をちょっと高台にある友人の家に止めようと思って外に出た。車の鍵とジャンパーを着て、ニットの帽子をかぶって、それと何かに使えると思って首にタオルを巻いておいた。靴は長靴を履こうか迷ったけれども、普通の靴を履いて出た。携帯はポケットに入っていた。それが午後3時15分か20分ごろだと思う。今思うと良くない行動だったと思う。

隣の家のご夫婦が立っていて「すごい揺れだったねえ」なんて会話をしていた。そのうち、面識がない人だったが、越田製作所の人たちが何か叫びながら避難所から降りてきた。そのとき田代川から白いしぶきがあがった。たぶん第3防潮堤に当たったものだと思う。それを見て津波が来たのだとわかった。上の避難所に逃げようと思ったが、自宅までは波は来ないと思っていたから、トコトコと歩いていた。家から避難所まで80㍍もないけど、途中振り向いたら、真黒い波が家をのみ込んでいた。それを見た瞬間に全速力で走って、高台にあがると同時に波が避難所にぶつかった。例えるならば「田老にアフリカの砂漠にいる動物を見た感じ。なんでコレがあるの？」って感じだった。だけど音は全然聞こえなかった。最初の波が来たときに屋根が燃えた2階建ての家が、避難所の脇の家にぶつかった。田老の最初の火事だと思う。3時31分にそれを撮った写真がある。

その後、流れた人を3人見つけた。避難できた人と協力して引き上げて助けた。消防をやっていたので、骨折している人の応急処置をした。流れてきた丸木や鋸、毛布で簡易タンカを作った。救助も来ないし、火事もあって第2波も心配で、その場にいられなくなってしまった。田老診療所は無事かと思い、国道まで出て行ったが、診療所は駄目だったので、掘丁の社会福祉協議会まで2回往復して運んだ。いざそうなったらできるかどうかわからないけど、避難所にもう1波が来たら「怪我人を残して逃げないといけないのかなあ」と頭がいっぱいになった。乙部・野原・青砂里の行方不明者は1回の波で流されてしまったと思う。避難所にいるのが怖くて、その場にいた20～30人ぐらいで越田に行こうと山を越えた。山が枯れ葉の状態だったのは歩くのに都合がよかった。午後5時前に道の駅に着いて、そこから誘導されて、グリーンピアに行った。

下山英子さん（昭和36年生、女性、乙部）2012年10月16日取材

次の日が娘の卒業式だったので、髪を切りに理容室に行っていて、

ちょうど髪を切られていたときに地震がきた。それで車で自宅まで帰ることにした。途中、漁協のあたりで消防車とすれ違った。道は特に混んでいなく、すぐに家には帰れたと思う。自宅は避難所の近くだったけれども、避難所にはそんなに人がいなかったので、家のなかで着込めるだけ着込んで、水や書類をリュックに入れて車に積んでいた。3㍍の津波が来るという放送が急に途切れた。旦那が帰ってきて外で何かしゃべっていたので、自分も何も持たずに外に出てしまった。

避難所のほうから「あれはなんだー」という声が聞こえて、フッと海をみたらすぐそこに魔物のような灰色の波が押し寄せていた。既に堤防は越えていたのだと思う。それで、逃げろということになって避難所の方に逃げた。何を思ったか、車の中からリュックだけを背負っていた。途中、近所のおじいさんとおばあさんの手をとってあがろうとしたけれども、波にのまれてしまった。スーッと水が引いて、必死に流れてきたトタンをつかんで助かった。避難して助かった人たちに安全なところまで上げてもらった。ヘドロものみ込んだし、火も近づいていたのでこのまま死んでしまうと思った。おじいさんの顔色が変わってしまっていた。旦那も1人で子供たちを育てないといけないと決意したみたいだった。

私は動揺して泣きじゃくっていたみたいで、Tさんに「何泣いてんの！泣いたってしょうがないでしょう！」と言われて少し冷静になった。けれども、振り返ると田老の町が見る影もなくなっていたので、何があったのだろう、何が起こったのだろうと茫然としていた。第2波が怖かった。どこかで「助けてけろー」って声が聞こえたけれども、力もないし、怪我をしていて助けられない自分がいた。

和野のほうに抜ける山を登った。初めて登った道だった。和野の人たちはペットボトルに水を入れていた。人もたくさんいたし、山手の人たちは避難者を受け入れる準備をしてくれていた。旦那の叔母の家があるので、そこに3日間お世話になった。娘と息子とは連絡がとれない状態だったので心配だったが、それぞれ小学校と田老総合事務所に避難していたので、翌日に旦那が迎えにいった。それでやっと家族が揃ったが、情報が集まらないので避難所に行った方がよいということになってグリーンピアに行った。

旦那の叔母が着るものとか持たせてくれた。大広間に布団を敷いて寝た。そうしているうちに物資が届いて、着るものをたくさんいただいた。グリーンピアについた時に、近所の人たちと会って、安否の確認をし合った。田老の町には見に行く気にはならなかった。見に行ったのは4月ごろだと思うが、町を見てショックを受けた。家の基礎だけ残っていたのを見て、声が出なかった。旦那の軽トラックが山の上にあったり、津波ってすごいんだなって思った。

山本実さん（昭和23年生、男性、野原）２０１２年10月15日取材

水産加工団地で働いていた友人に会いに行ったとき、地震の揺れを感じた。地震が大きいから津波が来ると思った。すぐ妻に携帯で電話して「待っていろ」と言った。一旦、車で国道を通って、田老漁協のところで曲がって、たろう観光ホテルの前の自宅に戻った。そのとき国道は混んでいなかった。加工場から自宅まで10分もかからなかったと思う。妻を車に乗せて中学校まで孫を迎えに行った。そのとき消防団員が誘導していた。途中ドカーンという大きな音を聞いた。中学校では生徒を帰さないということで、国道を通って掘丁に向かっていった。乙部方面から国道に合流する車を何台かみたが、5台ぐらい後ろの車はついてこなかった。国道が優先だったから、合流できない車は流されてしまったのだと思う。掘丁のところで車から降りて、町を見たら橋に瓦礫が上がっていて、堤防がもうなかった。すごい瓦礫だった。危機一髪だった。それで、道の駅の防災センターに行ったけれども、人がいっぱいで、グリーンピアに誘導されて、16時ごろには着いた。

グリーンピアは12日には人がいっぱいになっていた。宴会場や廊下あたりにも人があふれていた。食べ物は4日ぐらいあったけれど、そのうち1日3食から2食になった。お風呂も1週間は入れなかったが、摂待の親戚が風呂に入れてくれた。水のありがたさを初めて知った。4月ごろアリーナに移動した。腰が悪いので、座っているのも大変で、

ご飯をもらうのも辛かった。たくさんの方に世話してもらってありがたかった。

息子は貨物船で働いていたから、電話は通じなかった。北海道の苫小牧に行っていたが、息子の友人が自分たちの無事を知らせてくれていた。1週間後ぐらいに親戚が孫を連れて来てくれた。腰が悪いから町を見にいけなかったけれど、妻は見に行っていた。車が通れるようになってから、自分も車で見に行った。自宅に行っても何もなかった。

避難場所は出羽神社で、昭和8年の津波のことは親から聞いていて、地震がきたら山へ逃げろと口酸っぱく言われていた。野原で大きな被害が出てしまったのには、二重の堤防があるから。たぶん逃げなかったのだろう。あと、3㍍という津波情報の放送も信じてしまったのだと思う。

仮設住宅にはお盆すぎに入居した。同じ部落の人が入っているからよかった。アワビを採る鉤とかいろいろ作って人にあげている。何かしていたほうがいい。

山本れん子さん（昭和27年生、女性、青砂里）２０１２年10月14日取材

午前中は理容業をやっているので、髪を切ったお客さんとおしゃべりをしていた。3月9日の地震のときに出していた避難リュックをチラっと見ながら片づけないといけないと思っていた。昼食をとって、休んでいたら地震が起きた。夜勤で家にいた夫が出てきて、ガスの元栓を締めた。水筒に水をつめて、避難リュックをもって、重ね着をして、鍵も締めて逃げた。駄目だとは言われてはいたけれど、早いうちなら良いかと思い、大きな毛布や羽毛布団、バスタオルを積んで車で逃げた。そのときは、今晩は家に帰れないと思っていたぐらいだったが、まさか家ごと無くなるとは思わなかった。大きな津波が来ることは覚悟していた。出羽神社が避難所になっていたけど、車にたくさんの荷物を積み込んだから、堀丁のほうに向かった。家から国道まで見かけた人は3人だけだったと思う。そのとき、消防車とすれ違ったと思う。45号線は両車線とも混んでいたが、北に行く道が特に混んでいた。国道に合流するのに少し待ったが、すぐに合流できた。津波が来るとは思っていたけど、どれくらいか気になったので、堀丁の歩道橋の所に車を止めて町を見ていた。「忘れ物を取りに行こうか」と言った旦那を怒って引き止めた。だから歩道橋のところから津波を見るまで、結構時間があった。そこで津波を見た。初めに三王閣の遊歩道に津波がぶつかって、青砂里の堤防を越えたのを見た。ただただ高い水が来た。本当に早く、あっという間に水が町に流れていった。青い色の屋根からちょろちょろっと炎が見えた。乙部の方は見えなかったけども、町や長内川に瓦礫が流れ込む様子が見えた。歩道橋には何十人もいた。津波を見て、帰るところはないとわかって、道の駅に行こうとしたが、狭くて夜は横にはなれないと思ったので、グリーンピアに行った。到着したころはあまり人は来てなかった。それからグリーンピアでずっと避難していた。

山本ヤスさん（昭和16年生、女性、荒谷）２０１２年10月14日取材

午前中は家事をして、花を買いに町に行こうと思っていたところに、地震がきた。早く、ママ（嫁）が帰ってくればいいなあって思いながら、裏に出たり入ったり、出たり入ったりとオロオロしていた。表のほうに出たら、向かいの家のかあさんがリュックを背負って駐車場に向かって行く様子だった。何かあれば人の声がするのだけれども、全然人の声がしなかった。しばらくすると、ママが帰ってきた。ママも慌てながら荷物をまとめた。自分も、避難リュックを背負って車に乗ったけれども、車が走らなかった。だから、車から降りて、裏の土間に立ったまま、ボーっとしていた。後から考えたらパニック状態だったのだと思う。堤防で海が見えないので、何もわからなかった。放送も聞こえなかった。近所の人たちの声もなく、周りが気になったところで、知人の声が聞こえてきた。それで歩いて逃げようということになった。靴に履き替えて、家を出た。玄関を出て国道を見たら、家から１００㍍もしないところに瓦礫の山が見えた。津波の音は全然しなかった。長内川を津波が遡ってできた瓦礫だった。それで、裏山に走って逃げた。

そこにはだいたい10人ぐらい逃げてきた。そうしたら火のついた家が見えた。火事がでれば裏山まで火が回ると言うので、さらに山を登って、中学校を抜けて、孫がいる小学校で一晩泊った。山を越えるのも、逃げるのも「てんでんこ」と言うので、バラバラに避難するものだと思った。

小学校で一晩過ごして、北高に行く途中にある姪の家に行こうと思って、線路を歩いていたら、「小学校にみんな行くから戻ったほうがいいよ」って言われて、確かに息子が小学校に来ると思って引き返した。そうしたら、息子と娘が迎えに来てくれていた。それからグリーンピアに4～5日間避難した。

田老の町を見に行きたくてしかたなかった。けれども息子に止められていた。5日目に息子の車で町に行った。自衛隊がたくさんいた。国道からただ見ていた。「家のものは何にもないよ」と息子が教えてくれた。そこで小本にいる姉と会って、そのまま自分だけ姉のところへ行った。水道やお風呂があって本当に助かった。小本で50日間過ごした。そのあと、仙台にいる娘のところで2か月いた。いつまでも親戚に頼れないから仮設ができた7月ごろに入居した。2世帯借りて、孫3人と息子夫婦6人で暮らしている。

小林トキさん（昭和11年生、女性、小林）2012年10月17日取材

3月3日の避難訓練はときどき行っていて、2011年は小林の連絡員だったので報告のために参加した。参加者はだいたい決まっていて、12～13人ぐらいだった。3月9日の地震は自宅で揺れを感じてびっくりした。外を見て、放送を聞いていた。津波の心配はないという情報もあるし、家は高い所なので逃げはしなかった。

3月11日の午前中は大平の種屋さんに行ったり、畑の世話をしたりしていた。昼食を食べて、旦那の運転で小田代温泉に行った。着いて間もなく地震にあって、電気が落ちてしまったので、外でブラブラしていた。駐車場には10人ぐらいいた。送迎バスが町に降りて行った。1回目の揺れの時に、津波の高さが3㍍という放送を聞いた。2回目の揺れで大津波警報が流れた。サイレンは1回だけ鳴った。それから、パタッと音沙汰なかった。後で聞いたことだが、総合事務所にある自家発電が倒れて、放送ができなかったらしい。

自宅と裏山が崩れるのが心配だったので、町に降りてきた。田老駅の下の道路を走っていたら、真黒い水が前からきた。田老駅の駐車場のところでUターンして北高のほうに逃げた。後ろからと、左手の神田川にもサーっと波が登ってきていて、競争するように逃げた。町に戻るのが2秒3秒早かったら死んでいた。危機一髪で、まさに夢のようだった。国道の上からは水は来ていなくて、神田川もあふれてなかった。対向車も3台ぐらいあって、町のほうに行くなと手を振ったけれども、気づいてなかったと思う。

それから、ふれあい荘に避難した。そこで20人ぐらいが立っていた。うす暗くなるまで一緒に立っていたけれども、町のほうから火が見えた。誰かが「北高に避難してください」というので、北高で10日間お世話になった。娘は宮古市に務めているので、翌日には家で会えた。衛星電話が繋がったころに、親戚とかと連絡をとった。

翌日からは行けるとこまで車で行って、線路を伝って、家の片づけをした。線路には親戚の家が打ち上げられていた。線路にはたくさんの人がいて、泣きあったりしていた。家の中には水はなかったが部屋によって具合が違った。玄関は無くなっていて、廊下には瓦礫が入っていた。2階は無事だったけれども、水も電気も通らなかったので、4月から5月いっぱいはグリーンピアに世話になった。毎日毎日、片づけをしに通った。沢で洗濯したり、雨水をためたりした。

山崎弘さん（昭和20年生、男性、大平）2012年10月17日取材

3歳ごろにアイオン台風を経験していて、川の氾濫を見たのを覚えていたので、自宅付近の田老川の氾濫が怖かった。津波は堤防もあるし、水門も新しくできたので、津波がきても被害はそこまでは大きくないとは思っていた。避難訓練では、行政的には日枝神社の方に避難することになっていたけれども、自宅から海に向かっていくことになるの

で、国道の高いところに逃げるようにしていた。避難訓練に参加する近所の人は日枝神社に逃げたと思う。3月9日の地震のときは自宅にいた。これまでの経験で津波は来ないとは思ったけれども、避難警報が出たので、樫内の親戚の家まで避難した。

3月11日の午前中は孫を病院に連れて行っていた。自宅に戻ってご飯を食べて、ゆっくりしていたときに地震がきた。妻と嫁、高校生の孫2人の家族5人が家にいた。中学校3年の孫娘は中学校、長男は役場にいた。家が揺れてすぐに電気が消えた。すごい揺れだったけれども、物が落ちるような揺れ方ではなかった。1回目の揺れで外に出て、避難を始めた。宮古病院に勤務していた嫁は病院に行かせた。妻と孫2人は樫内の親戚の家に避難した。持ち物はリュック1つぐらいだったと思う。揺れから5～10分ぐらいで避難を始めた。自分は車1台を高台に運んで、また戻って2台目の車で樫内まで行った。田老川の様子は変化もなく、車も普通に走っていて、大きな音もしなかった。津波の無線もなかったと思うし、津波がきても自宅まで波が来るとは思わなかった。孫たちは親戚の家にいると思ったが、津波が来るということで、樫内の高台から見ていたらしく、探し回った。

結局、田老に戻ろうと思ったが、国道が渋滞していたので、歩いて橋のところまで行った。人は少しいたけれども、シーンとしていた。田老の町が真黒な湖のようになっていた。明るいうちに、樫内に戻って状況を伝えた。個人宅にいても仕方がないので、樫内の集会所を開けてもらい、逃げてきた60人ぐらいで避難した。

翌日に中学生の孫娘を迎えに行ったが、中学校の判断で帰さなかった。その後、親元に帰すということになって孫娘が帰ってきた。3日後から孫たちは嫁の実家にお世話になった。私と妻は3月いっぱいは樫内集会所に、4月からグリーンピアのアリーナに避難した。窃盗団の噂が立って心配だったから、自分は3日後から2階が残った自宅に寝泊まりした。樫内の集会所には1週間ぐらいは支援物資もこなかった。親戚を頼ったりして食糧や燃料、毛布とかを集めたり、役場と連絡を取らないといけなかった。燃料はポリタンクを集めて石油をろ過した。電気が復旧するまでには1週間以上かかった。水は樫内の人たちが使っている沢水を使った。動きが取れなかった自分の代わりに妻が自宅の片づけをした。5月ぐらいには自宅の修理が終わった。地震があれば逃げる生活だが、仮設住宅の人たちには申し訳ないと思った。

3　教訓と実際

14時46分に地震が発生してから津波が到着するまで、およそ40分の時間があったが、そこでの行動はそれぞれが置かれた環境によって多岐にわたる。避難手段をみても、徒歩で一次避難所まで逃げる人もいれば、車を使って移動した人もいる。平坦部の場合、速やかに一次避難所まで逃げられるよう避難路が整備されており、徒歩で高台にある一次避難所まで逃げた人も少なくない。毎年行われる避難訓練においても、自宅と一次避難所を徒歩で移動することが想定されていた。一方で多くの人は、自宅・外出先かを問わず、避難時のいずれかのタイミングで車を使用している。渋滞による逃げ遅れや不慮の事故の可能性がある車での移動・避難は、本来適切な避難方法ではないとされている。しかし、車社会を前提とすれば車を使った避難は、選択肢のひとつとして多くの人びとがとった自然な手段であった[注(4)]。発災時避難の視聴覚情報も様々である。特に音については「ドーン」という波と波が沖合でぶつかる音を聞いた人もいれば、津波を見る直前まで「音はしなかった」という人もいる。田老市街地では津波の高さが3㍍という情報が防災無線によって流れていた。しかし、停電によってその情報が更新されることなく、正確な情報を得ることができなかった。3㍍は防潮堤を超える高さではないため、その情報を信じ込んで、逃げ遅れが発生したのではないかという声もあった。

自主防災組織

平坦部における避難所は田老総合事務所と宮古市立田老第一小学校、岩手県立宮古北高校といった公共施設やグリーンピア三陸みやこ・田老ふれあい荘、曹洞宗常運寺が大規模な受け入れを行った（表1参照）。

表１　避難所一覧

主な避難所	人　数
田老総合事務所	280
田老第一小学校	208
常運寺	245
県立宮古北高校	100
田老ふれあい荘	170
火葬場付近	13
道の駅たろう	34
グリーンピア三陸みやこ	303
計	1353

＊宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～』より作成

日枝神社・熊野神社・出羽神社に一次避難所として一晩過ごした人びとがいるが、火事の危険性や情報・救助不足の懸念から、２日目以降には大規模な避難所へと移動している。実際に、乙部地区や熊野神社付近から発生した山火事は大小の発火を繰り返している。完全に鎮火されたのは16日の７時のことだった。この間、避難者を支えたのは自主防災組織である。和野や樫内といった近隣高台集落の集会所も避難所となっており、各避難所では名簿が作られ、多くの人びとは、その名簿を頼って家族や知人を探しに避難所を巡りまわった。避難所の運営は避難者自ら行った。電話は不通のところも多かったが、携帯電話会社のアンテナ付近まで通って連絡をとる人も多かった。18日にはＮＴＴドコモの衛星携帯電話が、グリーンピア三陸みやこと県立宮古北高校にそれぞれ10台、田老ふれあい荘・田老総合事務所に１台ずつ設置され、一般の通信状況は大幅に改善された。電気の復旧は地域によって異なるが、田老第一中学校付近で復旧したのが20日であった。

写真１　簡易生活用水（再現）
2015/05/04　撮影：伊藤 純

こうした状況においても、例えば生活用水には沢水をせき止めて洗濯したり、救助活動を行っていた消防団員へ、薪を使って沸かした風呂を提供するなど、工夫して難をしのいだ（写真１）。

インフラが復旧するまでは、流出を免れた世帯も同様に生活に支障が出ていた。田老第一小学校の近隣に住んでいる女性（昭和20年生、田の沢２０１３年８月22日取材）は、当時の状況を次のように振り返っている。

地震の揺れは感じたが、全く物は落ちなかった。ここは地盤が強いので揺れないし、コップ一つ壊れなかった。津波が来るとは思わなかった。ずっと家にいて、ちょうど外に出たとき、役場のところにすごい水しぶきがかかるのをみた。地区の人が「毛布だしてけろー」と叫んで走ってきた。津波が来てるとは思わなくて「何に使う毛布？」と聞いて、「津波で濡れた人がいるから必要なんだ」と言われて、とりあえず３枚渡した。それでも、また来たので、一輪車を引いて地区の人たちから集めてまわって、避難してくる人びとに配った。そのうち「田老が全滅」ということを知った。

小学校の体育館が避難所になってたくさんの人たちが避難してきた。お年寄りたちがどうしたらよいのか不安にしている様子がよくわかった。風呂が薪風呂だったので、沸かして消防団の人たちも入った。水は汲んできて、薪には瓦礫を使った。瓦礫撤去や遺体の捜索をしている人たちは、風呂もろくに入れなかった状況だったので、それは感謝された。発電機をもっていたので、それで時間を決めて、炊事洗濯した。食料は少しだが、避難者に持って行った。

行政の支援では３月12日の朝には、宮古市市民生活部によって５００個のおにぎりが届けられた[注(5)]。19日からは自衛隊による給食支援が行われたが、食料供給ラインが安定的に確保されるまでは、避難者への食料は近隣地区からの炊き出しが支えている。田老地区の場合は、神田・末前・青倉地区の人びとによる支援が大きい。炊き

出しに参加した神田地区の**堰代秀子さん**（昭和33年生、女性、神田、２０１４年４月21日取材）は、次のように情報が錯綜していた様子を振り返っている。

今回の地震の揺れは家で感じた。１３０年近い家で、耐震ではないので家が壊れるかと思った。物は落ちなかった。大きい揺れというより長い揺れだったと思う。11日は電気が消えたが、神田はふれあい荘があったからだと思うが、次の日には電気が復旧した。一晩だけ電気がない中で過ごした。水は普通に出た。水道もあるけど、沢から水を引いている家も何軒かあるので、何かあっても大丈夫な地区ではある。

経験したことがない揺れだったので、街のほうに津波が来るとは思ったが、これほどまで大きい津波が来るとは思わなかった。自分の家が潰れると思ったので、消防の屯所の無線で何かしら情報があると思って、大体みんな屯所に集まった。神田は17軒あるが、大体50人ぐらいそこにいたと思う。結局、無線の情報はなかったが、数人が街のほうから逃げてきて町の情報を得た。それが、午後３時ぐらいのことだと思う。グリーンピアや総合事務所・北高に逃げる人が多いから、神田まで逃げてきた人は20人いないぐらいだったと思う。津波が川をさかのぼってどの辺まで屋根が流れてきたというようなことを聞いた。

午後４時ぐらいに大平に住んでいる市議会議員に炊き出しの準備をするようにお願いされた。男の人は消防のほうに行ったので、男の人が何をやっていたかはあまり覚えていない。女の人は炊き出しを始めた。仕事とかで地区の外に出かけている人は帰って来られないので、炊くのは10人いないぐらいでやった。

神田は何軒もないが、田んぼが少しあるので、田んぼをやっている人がすぐに米を持ってきてくれた。その日はおにぎりを作った。米は十分にあったけど、電気がなくて、エンジン式の精米機で付きっきりでずっと精米していた。１回に炊ける量も限られてしまったが、集会施設にある一度に10㌔ぐらい炊けるガス釜で炊いた。１日20回ぐらい炊いたと思う。汁物用の大きいお鍋でも炊いた。それは７㌔ぐらい炊けたと思う。相当な量で、人数もいないのでおにぎりだけで精一杯だった。夜通しやるつもりだったけど、消防の指示で夜の12時で炊くのをやめたが、足らなかったのか、連絡が徹底していなかったのか、12時すぎても「次ができたか？」って取りに来る人がいた。今思えば、情報が混乱していたのだと思う。誰の指示が正しいのかがわからなかった。朝４時から炊き出しを再開した。汁物も作ったけど、道路がなかったために運べなかったらしく中止になった。消防団のためにお茶をペットボトルに入れたが、「何も持ってない人を前にして飲めない」というような現場の状況を聞いた。私たちは炊くだけで、おにぎりを取りにくるのは役場の人たちだった。電気もないし、道が悪くて歩けないので、背負いカゴやリュックを集めて運んだ。だから、おにぎりは一つ一つラップで包んだ。11日の夜にはお寺におにぎりが届いたらしく、「そのことは忘れられない」と後で言われた。

大平地区の上のほうは被害があまりなかったので、何人か泊めている人もいた。電気が通ってなくてご飯に困っていたので、おにぎりを譲ったが、個人のところにあげれば良いのか、大きい避難所にあげればいいのか、指示が無くてどう判断すればよいか躊躇はした。

集会施設のガスがなくなったら、個人の家のガスボンベを持ってきて炊いた。ラップとホイル、米は途中で無くなってしまって、地区の人が自分用に買い置きしていた分を出した。地区の人はみんな身を削ったと思う。地区の人たちがいろいろと出してくれたのが本当によかった。自家用に漬けていた梅干しとか昆布とかを出してくれた。

４日間ぐらいで物資が届くと思っていたが、１週間ぐらい米が来ることはなかった。それから新里の給食センターが賄うということになって、消防の人たちの分ぐらいになった。それまでは集会所に詰めていたので、街を見に行ったりもしなかった。

身元の確認

12日の夕方には県立宮古北高校に田老地区の遺体安置所が設置された[注(6)]。運び込まれた遺体を医師だけでなく、田老の人びとも加わり、顔や持ち物・着物から身元確認が行われた。23日現在で95体の遺体が

安置され、そのうち76体の身元が確認されている。20日からは田老の火葬場が稼働したが、燃料の不足から1日に3体の火葬が限度であった。26日から遺体安置所は田老公民館へと移設された。27日現在で117体（そのうち身元不明者が19体）、28日現在で121体という状態であり、生き延びた人びとにとって混乱した状況のなかで、家族や友人の死を迎えることになった。

注(4) 岩手県・宮城県・福島県を対象に行われた平成23年東日本大震災における避難行動等に関する面接調査（住民）単純集計結果（内閣府・消防庁・気象庁）によれば、避難手段について「徒歩で避難した」が39％であったのに対して「車で避難した」が55％と最も多かった。

注(5) 宮古市『東日本大震災の「記録」―岩手県宮古市―』（2003年）

注(6) （5）に同じ

4　摂待地区の状況

摂待地区は摂待川河口にある水門を破壊して、摂待川を遡上した津波が集落と水田を襲った。特に下摂待地区は比較的高台にあった1軒を残して7軒が流失した。漁港とアワビ増殖センターといった水産施設も全壊する大きな被害を出した。下摂待の様子を摂待の花輪長一さんと舘崎隆保さん、中学校の様子を当時田老第三中学校の教員であった金澤祥子さんの言葉を借りて見ていきたい。

花輪長一さん（昭和10年生、男性、摂待）2013年5月2日取材

午後になって小堀内の漁師から電話があった。息子が海に出ていて、潮で船が転覆しそうで、船で見に行ってくれないかと頼まれた。午後1時半、風は南から吹いていたが、たいしたことなかったので沖に行った。摂待漁港の裏から出たら北の風に変わった。50～60年ぐらい漁師をやっていたが、船を走らせているうちにこんなに風が変わるのは不思議だなと思った。だけど、風はたいしたことないのでそのまま船を進めた。小堀内のほうを見たけれど、船は見えなかった。

そしたら、沖から音を立てて風とうねりが来た。今思うとそれが津波の前触れだったと思う。こんなことは不思議だったので、作業を休んで自宅に向かった。陸にあがったらSさんがいた。「なんだSさん」といったら、「沖がうまくねえから早くやめてきた」って言ったので、「ほんだら家さいくびゃー」ってなったが、Sさんは「もう少しいる」ってなって、家に帰った。途中、消防団が水門を閉めに行くのとすれ違って会話した。自宅に着いたら、嫁と息子が薪割りしていた。「みごとな地震がきたけど、茶ダンスとかを押さえたのでコップとか瀬戸物は助かった」と、そんな話を外でしていた。

「津波だー逃げろー逃げろー」とサイレンを鳴らして沖から消防団がやって来た。「津波だー」って言われても「何の話だ」と思った。ともかく、山に自分の畑があるのでそこに避難した。自分のところでなくても、避難の時はどこでも高いところに逃げるのが当然だから、すぐ上がっていった。そこで3人で見ていた。そしたら、建物やサッパを押し壊しながら物凄い音を立てながら津波が来た。それと引き波がみごとに強かった。向かいの山から下摂待まで海のようになっていた。

歩けない母がいたなと思って、母を背負ってこようかと思ったが、息子が「家が流れた」と言っていたのを聞いて、もう母は駄目だと思った。津波が引けてから背負って帰ろうと思っていた。水門を閉めたから下摂待は海のようになっていたので、3日ぐらいは探せる状態ではなかった。3日目の午後に妹が田んぼで母を見つけた。毛糸のほっかむりをしていて、大きな傷もなく寝ていた。既に自衛隊や消防がいたので、消防が連れて行って、宮古のさかき仏具葬儀社に頼んで、火葬の段取りをして火葬をした。小本の寺で葬儀をやって納骨した。

舘崎隆保さん（昭和7年生、男性、摂待）2013年5月4日取材

トマトの支柱に使う竹を切りに防波堤のほうに行っていたときに揺れを感じた。地震が大きく海抜も低いところだったので、その場に鉈や鋸を置いて、急いでバイクで家まで戻った。家に帰ったら、電気が

消えていたので、直ぐに逃げないといけないと思って、山の避難所に逃げた。避難所は父親が作ってくれて一晩は過ごせるものだった。津波が来ることは予想できたが、防波堤は超えないと思っていた。避難所に逃げてからも大きい揺れが2回ほどあった。第1波は20分後ぐらいにあった。南の沖で雷のようにゴロゴロゴロゴロゴロゴロ…というような音が聞こえた。合わせて3波ぐらい来たと思う。一番大きいのは第2波。宮古や田老と違って1か所から津波が来るのではなくて、ところどころから来た。

妻も一旦避難したけれども、ガスの元栓を閉めに家に戻ってしまって津波にとられた。大声で叫んだが、自分の声よりも津波の音の方が大きくて聞こえなかったのだと思う。妻とSさん夫婦の3人が流された。Sさんはどうにか屋根に上って、泥まみれになりながらも助かった。流されたと思っていたので、泥まみれの人間が動いていたからびっくりした。

津波が引き始めて高台から下りてきて、流された妻たちを探した。他の人たちでSさんの泥を洗う作業を行った。Sさんの奥さんはすぐに見つかった。

また津波が来る心配があったので、その日は妻を捜索するにもできなかった。逃げてきた人で相談して、避難所で一夜過ごすことにした。消防団員が、山を越えてきて、改善センターに行くよう促された。結局、山を越えられないような人もいたので避難所に残った。8人ぐらいがその日は残ったと思う。消防団員が往復してくれて、おにぎりと石油ストーブを持ってきてくれた。

金澤洋子さん（昭和27年生、女性、乙部）2012年10月15日取材

結婚してから主婦や介護師を経て、田老第三中学校に用務員として務めていた。小学校、中学校の併設校で合せて20人ぐらいの生徒がいた。田老第一中学校に統合されるので閉校の準備をしていた。PTAに閉校式の案内文書を配るため車の運転をしていたら、車のハンドルがきかなくなった。車を止めてみたら電信柱がゆれていた。文書を配布しなければならなかったので、下摂待に行って「すごい地震だったね」と話していた。職場での非常時の役があるのを思い出して、すぐに学校に戻った。子供たちはすでに避難していた。校舎の中はぐちゃぐちゃだったけど、とりあえずボイラーのチェックと職員室と校長室の鍵を閉めて、校庭に避難した。そのとき、海の方からドドドドって雷様のようなわりと長い音がした。「こういう音がしたら必ず地震がくるんだ」と同僚が言っていたが、やはり大きめの地震がきた。

下摂待の方から煙が見えた。摂待川を見ると水がひたひたひたひたと来ていた。下摂待で鮭の養殖場、昆布・わかめ漁をやっている父兄が学校に避難してきて、自然と下摂待は全滅だという状況がわかって、みんな茫然としていた。

高台から下摂待が一望できるので行ってみたら、湖のようだった。学校は避難所になっているので、避難所の設置を始めた。水道が出るかぎり、バケツに水を貯めて、地区の人たちも蝋燭や毛布を持って来てくれた。暖炉の薪があったので準備していたら、消防の人たちが来て、水門が決壊したので学校は避難所として使えないと言われた。子供を親元に帰したあと、水沢の避難所に避難する校長グループと、グリーンピアに避難する副校長グループに分かれた。田老の自宅が気になったので、許可をとって町の方に行った。田老の町は壊滅的だということは聞いていたので道の駅に行った。そこで旦那がグリーンピアにいることを知人が教えてくれたので、グリーンピアに行ったが、人がいっぱいでその日は会えなかった。

5　避難所から仮設住宅への入居

道路や交通・物流・水道・電力・通信などのライフラインが回復するまでは、グリーンピアのような大規模な避難所では避難者自らその運営にあたっていた。前出の、金澤純二さんは発災直後のグリーンピアの運営には地域の人びとの活躍が大きかったと、次のように振り返る。混乱と悲しみのなかでも、助かった人びとは前へと進まなければならない。そうした切迫した状況のなかで、避難者一人ひとりは複雑

な思いを抱えたまま避難所での生活を迎えることになった。

金澤純二さん（前出、２０１２年10月15日取材　２回目）

まずは余震に対する点検、避難路の確保、懐中電灯の用意などを最初に確認した。名簿を作ったほうがいいということになった。グリーンピアに来てから、私や赤沼正清さんなどが、自主的な運営組織を立ち上げた。千葉さんは名簿作り、自分のような救助経験者や看護師経験者は怪我人や妊婦の対応をして、秋田の消防隊と連絡調整を行った。妻や中学校の先生などは清掃をしてもらった。名簿作りは助かった人が多いと思う。なんとかしなければいけないと思って自然とこうなった。防災婦人部や自治会の防災関係の組織があったと思うけれども、みんなバラバラになってしまったので動きは取れなかった。

４月になってから自主的な運営組織から役場や社会福祉協議会の主導に移った。３月下旬に田老の人たちをアリーナの１か所にするということになって、荷物はまとめておけば自衛隊の人が運んでくれた。これは遠い避難所にいた方にとってはすごくよかったと思う。アリーナでのスペースは１人あたり毛布１枚半。これだと寝ることしかできないので、知人の世帯と協力して広めのスペースを確保して、使いやすいように変えた。スペースに余裕があったから、原則通りではなくて体が不自由な方の話を聞いて、もう少し融通を利かせてくれてもよかったと思う。だが他の避難所をいくつか見たけれども、グリーンピアの避難所は本当に恵まれている方だと思った。

それでも、７００人の共同生活だから不平不満はどうしてもでてしまう。そのころは、生きるのに必死で、みんなひもじい思いをした。朝の炊き出しのときに女性の１人が「なんでこんな思いしなければならない。こんな思いするぐらいだったら、津波に流されて死んでたほうがよかった」って大きな声で言っていた。そうしたら、周りの人が「こらこらおめえさん何しゃべってんだ。そんなことを言うもんでねぇ。（診療所の）黒田先生も言ったように津波で生き残った人が亡くなった人たちの分まで生きていくことが生き残った人の務めだ。おめえさん何言う」って諭していた。言わないだけであって、「津波で流されればよかった」と思った人もいれば、「生きなければ」と思った人もみんな同じ気持ちだった思う。それを聞いたときが一番切なかった。みんながぎりぎりだったんだと思う。だけれども、本当にたくさんの援助をいただいて、その気持ちに支えられた。中学校の先生たちは食事も最後でもいいと、彼女らがお手洗いの掃除を率先してやりだして、こういう状況時にどうすればよいのか、というのを考えさせられた。

宮古に行ったときに、食堂に入れなかった。誰かが見ているわけではないけれども、支援してもらっていて、美味しいものを食べていいのかと思った。その後、初めて食べたのが合同庁舎で食べた安い定食だけど本当に旨かった。

6　復興へ向けた道筋

田老は３月31日から４月１日にかけて、７か所に分散していた避難所をグリーンピアのアリーナに４００人弱、ホテルに３００人統合した。これにより集約的な避難所の運営と支援ができる体制がようやく整った。５月中・下旬から応急仮設住宅への入居が始まり、８月下旬には田老地域の仮設住宅への入居が一段落となる（表２）。グリーンピア敷地内の仮設団地への入居の場合、可能な限り震災以前の地区を割らないように田老の南側から入居していき、地区ごとのまとまりをもった３つのブロックに分かれた。アリーナで

表２　田老地区仮設住宅一覧

		戸数
1	グリーンピア仮設住宅１(グラウンド)	248
2	グリーンピア仮設住宅２(グラウンド)	37
3	グリーンピア仮設住宅３(テニスコート)	122
4	樫内地区市有地	35
5	樫内地区民有地	37
6	宮古市立田老第三小学校グラウンド	7

＊宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～』(2013 年)より作成

の共同生活に区切りを迎えたが、なにより仮設住宅での生活がいつまで続くのかが、見通しが立っていなく、依然として不安な状況に変わりはなかった。壁越しで隣人の声や携帯電話のブザー音が聞こえるほどの一時的なものであり、厳しい住環境であった。また、仮設住宅への入居は同時に各世帯における自活の再開を意味していた。

復興に向けて行政と住民との本格的な調整が始まったのは9月22日から3日間開かれた「第1回田老地区復興まちづくり検討会」である。住民間の意見の集約と情報の共有、最終的には市長への提言をめざしている。そこでは市が行った意向調査「復興に向けた計画づくりに関するアンケート調査」（実施：7月8日～7月26日　田老地区の回収率55・8％）の結果が開示された。それによれば、今後の住まいについて「近くの高台」「同じ場所」と答えたのがそれぞれ47・1％、15・9％となっており、あわせて63％の住民が田老への居住を希望していた。一方で、「市内」（26・1％）「市外」（4・1％）とあり、田老からの人口流出が懸念されてもいた。今後の不安については、「住宅の確保」が57・3％、宮古市全体では37・8％で、他地区に比べて住宅に関する不安が際立っている。検討会では市の4例の復興パターンが提示されており、居住制限や嵩上げ・跡地利用をどのように進めていくかが検討されている。また、防災意識・防災教育の意見も交わされ、特に防潮堤について「14・7メートルでは低すぎる」「川に津波のパワーを分散させるように線形を見直すべき」「水門のあり方も見直すべき」「津波を川に流すというのは危険。津波は川をあがっていくのに被害が拡大するだけ」「高い防波堤や嵩上げ、人工地盤など、過剰な防御は住民の避難意識を低下させる」など、防潮堤の是非や利用をめぐって様々な意見が提出されている。

平成24年10月24日に市内の災害危険区域の、区域種別と建築制限を定める「災害危険区域に関する条例」が公布された。田老は平成25年2月8日に告示されたが、同年9月、27年7月と変更を繰り返しており、災害危険区域の区域種別と建築制限の確定が他地区に比較するとやや遅れている。第1防潮堤より海側が第1種区域になっており、住宅の建設は不可となった（図1）。

「田老地区復興まちづくり協議会」が平成24年5月26日に住民主体の組織として発足し、高台移転での生活や跡地利用・産業・防災について具体的な検討がなされている。協議会の下には防災検討部会・高台まちづくり検討部会・田老市街地検討部会・田老地区産業・雇用検討部会・漁業・水産業等検討部会などが置かれ、各課題について協議している（写真2）。

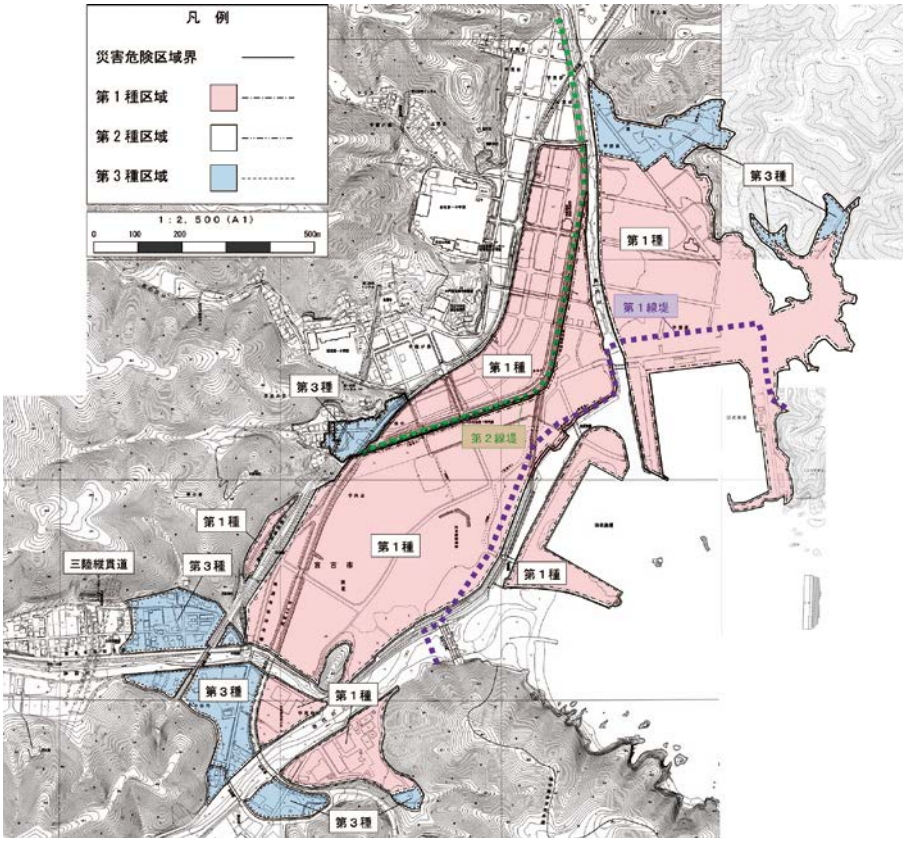


図1　田老災害危険区域

写真２　田老地区復興まちづくり協議会
（漁業・水産業検討部会）
2012/10/16　撮影：伊藤 純

協議会のメンバーの1人である**田中和七さん**（昭和29年生、男性、中町）（２０１４年４月22日）は「まちづくり協議会や部会では30代ぐらいの若い人たちがその場に来ないのが心配。これから30年後をある程度見据えた人たちがまちづくりに参加してくれたほうがいい。街に対する思いみたいなものはみんな持っていると思うし、仕事もあるが、そういう場に慣れていないと出れないんだと思う」と述べており、世代を超えた交際の難しさを滲ませている。

被災前には各自治会に会長・行政連絡員が置かれており、回覧板や広報を通して情報の共有がなされていたが、長期化する仮設団地生活の場合は、既存の自治会とはまた別に自治組織をつくることも検討された。例えば、グリーンピア仮設団地３（通称テニスコート仮設）は主に乙部・青砂里の住民ら１２２世帯が平成23年６月15日に入居した。その後３年間で、自立再建可能な30世帯が仮設住宅団地のもとを離れているが、ここでの生活の期間限定の自治会を発足させている。

仮設団地ごとに集会室や談話室が設置され、そこでは復興や福祉などに関する行政サービスの説明会が頻繁に行われている。また、集会室や談話室は住民同士の交流の場となっており、子供達の遊び場や裁縫や小物づくりサークルが立ち上がっている。厳しい避難生活を緩和させようと傾聴ボランティアも継続的に訪れている。

４０７戸。およそ1千人が生活する大規模な仮設団地となったグリーンピアでは、市街地で流出してしまった田老診療所がグリーンピア内に開業し、また仮設住宅の住民の要望に応えて、平成23年５月15日に仮設商店街「たろちゃんハウス」がグリーンピア駐車場の一画で営業を始めた。慰安コンサートや歌謡ショー、芸能人の公演などの復興イベントが開催されたりするなど、グリーンピアは半ば田老の中心地となっていた。

一方、他の仮設団地との情報・支援格差や、親戚の家やアパート等を仮住まいとするいわゆる「みなし仮設」の人びとへのケアも大きな課題として残った。被災後にみなし仮設に入居した**高屋敷吉蔵**（昭和18年生）・**トシ**（昭和23年生）（２０１５年３月10日取材）**夫妻**は当時の情報・支援格差と住民同士の形容し難い感情のズレを次のように述べている。

（吉蔵さん）サン・オーエンにずっと避難していたが、グリーンピアの方たちに会えるかたちがなかった。私は結構顔を出しにいったけど。

（トシさん）田老は小さいから、顔はみんな知っている。樫内仮設に入っている人達も知っている。だから、感情というか、最初はパニックになっているから、人の行動が気になる。グリーンピアに物資や情報が集まるけども、サン・オーエンのほうには全然そういう情報が入ってこなかった。でも、借りられるだけよかったかなと思うけれども、流れのなかで炊き出しとかそういうことがあって行くと、コソコソ言われることもあったと思う。なんでもない人も、家を流されてない人も皆さんが被災者だと思う。電気がつかなかったり、水が出なかったり、人を泊めてあげたり、みんないろんなかたちで震災に関わってきたから、そういう意味では見なくてもいいような人間模様を見たなと思う。すごく小さいことでどこにでもある話の感情だけど。そういうことがあったけど、疎遠になることはなかった。

（吉蔵さん）津波前までは目を合わせても、挨拶しないような人たちでも、みんな懐しそうに挨拶するようになった。そういう声がけは増えたと思う。津波のおかげというのは変だけど、そういうキッカケになったと思う。

当時も自治会長をやっていた。80軒ぐらいあったけど、上荒谷自治会は最終的に解散した。中学校の先のほうの荒谷の沢というところは

残った。会長・副会長・会計・監事・事務局・保険推進員・環境衛生委員・スポーツ・行政連絡員などの役員が集まってどうしようかと相談していた。自治会全員では集まれないなか、平成24年の秋ごろに役員会を開いた。総会ではないので、役員のなかで1人でも反対があれば解散はしないと決めていたが、全員が解散という決断をしたので解散となった。貯蓄していた自治会費は家が残った仲間たちの活動資金として渡したが、今でもそこでの自治会結成までは至ってない。

在宅被災者の女性は「正直つらかった。震災直後は電気も水道も通らなかったし、体育館から丸見えだから気を使った。別に見られてないだろうけれど気が引けた。その後も家を流された人たちと対面するのも気が引けた。診療所に行くのも、たろちゃんハウスに行くのも。流された人と残った人たちの差。町づくりの話もかかわる事ができないし、その案内も来ない。残った人たちと流された人たちでバッと分かれてしまった。言葉ひとつでも気になってしまう。それでも、震災前から夕刊配達をしていたから顔が広くてよかった。今では、何にもなくてもグリーンピアに上がってきなよと言ってもらってありがたい。さみしいから早く建物が建ってほしい。曲がり角もわからなくなる」と率直に語る。

同様に下町に住む在宅被災者の1人である**鳥居建一さん**（昭和16年生、男性、下町）（2013年8月22日）は復興後の田老について次ぎのような不安を抱いている。

食料の配給やイベントがあるとの放送があり、グリーンピアに行ったりすると、被災者と非被災者との間で気まずい思いをするという人もいた。そういう面でのギクシャクというのは、一般論としてどうしても出てしまうのかなと思う。家が残ったとしても、家があるだけで生活できないし、被災した人たちに対する遠慮が生まれた。

下町自治会は50世帯前後あった。それが津波後13世帯になり、2011年5月に解散になった。新しい町や高台移転が落ち着いたら、新たな動きがでるのかなと思う。残った家の人たちで自治会をつくるかもしれないしよくわからない。今まで一緒だった町の人たちが宮古や他の土地に行ってしまって、声を掛け合う人たちがいなくなってさみしいし、不安もある。町づくりの情報もあまり入ってこない。役場や保育所などの移転も話にあがったりしていて、残っている人たちにも重要な話だと思う。高台移転は残った人も入れるのか。そういった話も気になる。残った人たちにとっては、田老総合事務所のそばに町の中心があるような以前のようになってほしいと思う人もいる。13世帯が残されるのではないかと心配している。

被災から2年ほど経過するころ、グリーンピア仮設団地と田老平坦部を指す「上の町」「下の町」という言葉がどこからか生まれている。情報・支援格差、物理的な交流の減少によって誕生したこれらの言葉は、被災2年から4年ほどの膠着した田老の復興状況と震災によって分断されてしまった人びとのつながりをよく表している。仮住まいを余儀なくされた人びとの生活の拠点が、災害公営住宅や高台へと移り安定し交流が再び密にとれる状況が整うまでの道のりは長かった。

一方で、摂待地区の仮設住宅7戸は地区内の田老第一小学校内に仮設住宅があり、下摂待の人びとが入居していた。そのほとんどが上摂待地区への自立再建を決めている。震災後も被災前のコミュニティの延長線上での避難生活となり、塩が入った農地を再び利用できるように、地区主導で農地改良を行った。

摂待で漁師・釣船や農業を営む**畠山俊良さん**（昭和23年生、男性、摂待、2015年2月13日取材）は摂待地区の復興の様子を次のように見ている。

海水が入り込んだ摂待の田んぼは、県の補助事業としてまとめて土地改良を行っている。補助事業に関しては瓦礫を撤去するまでは考えてなかった。撤去が終わってから話がきた。何十年も前から、用水路に関しても改良されてなかったから、それも合わせて工事をお願いし

た。農業用水は河川から引いている。だから、摂待の場合は干魃があっても結構大丈夫。作業面を考慮して2反歩ずつ、堀返して地盤を作って表土を入れて、２０１５年の田植えに間に合うようにやっている。もともと２０１４年の田植えに間に合うように計画されていたが、工事をやっていた会社が倒産してしまい、工期が延びてしまった。田んぼはなぜか1年あけたら出来がよかった。海水はあんまり関係なかったのかな。わかめとか昆布とか取ってきて田んぼに捨てると、1年目はダメだけど、2年目はそこだけすごく出来る。栄養に関しては悪くはないのだと思う。個人単位では田んぼを持っている規模は小さいし、みんな同じ機械を使っているから、あまり経済的ではない。先祖の土地を守っているという感じだ。家計でみれば浜のほうが稼げる。田んぼの赤字を浜でうめているような状況だ。

下摂待は今は松の防潮林を造っている。風除けにもなる。昔もあったが津波でやられてしまった。1つ40㌧の水門が4つあったが、それが一気に津波で鮭の孵化場のところまでもっていかれた。解体するのに5日ぐらいかかったと思うが、その水門がいつ直るかはわからない。鮭の孵化場はすぐに直って、今年で2回目の放流になる。アワビの孵化場も平成25年度予算で作られて、10月ぐらいにはできて、嫁さんが稼ぎにいった。港は現在でも使えないこともないので、前と変わらないような感じで使っている。今年、仮設住宅もすべてなくなった。下摂待は1軒だけ残った。下摂待は共有財産や共有地もあって、それを整理しないと解散にはならない。摂待は他の地区に比べて元通りになるのが、早い方だと思う。世帯数も少ないし、変化もないので、前に向かっている。田んぼが植されば、「あー元に戻ったなあ」と思えるのだと思う。

7　復興を支える田老の漁業

田老漁業の変遷

田老は漁業の町である。三陸海岸のほぼ中央に位置し、外洋に接する地理的環境は三陸特有の好漁場となっている。今回の大震災のように海が命や財産を奪う脅威である一方で、海によって育まれる海洋資源は、漁業の町としての生活と経済を支えていたといっても過言ではなく、復興の支えともなった。

漁業を束ねる現在の田老町漁業共同組合の歴史は、明治35年の田老・乙部・摂待の漁業会の設立にはじまる。昭和8年の津波被害によって、それぞれの漁業会が合併して一村一漁協となり、昭和24年の水産業協同組合法の施行によって新体制となって現在に至っている。漁港は比較的小規模な第一種漁港として樫内・小港・青野滝・小堀内・水沢・摂待、市場を有する第二種漁港として田老漁港がある。平成15年度までは世帯単位組合員制度で、1世帯から1人の組合員であったが、後継者育成を見据えた個人組合員制度に切り替えている。

昭和50年代はじめまでは天然のワカメ・コンブ・アワビ・ウニといった地先資源を利用した沿岸漁業が中心で、繁茂・繁殖状況によるが、年間の漁期はワカメ（3～5月）、ウニ（5～8月）、コンブ（8～10月）、アワビ（11～12月）、まつも・ふのり（12～5月）となっていた。それぞれ漁協によって定められた「口開け日」に、鎌・撚棒・箱眼鏡を使用して採捕される。資源管理のために潜漁を禁止し、採捕日や採捕量にも厳しい規制がかかる。そのため、家計を補完するために、かつては遠洋漁業に繰り出す者も少なくなかった。

田老町漁業協同組合編『田老町漁協50年のあゆみ』によると、昭和33年には漁協の自営船（協栄丸）がマグロ船団に参加し、組合員がその乗組員になっていた。また、宮古の会社に勤めて遠洋漁業に従事することも少なくなかった。マグロ・サケ・マスを狙う北洋漁業や遠洋漁業の場合は季節労働であり、1年の大半を田老から離れて生活するのが普通であった。宮古のマグロ漁船の会社に長く勤めた**戸塚隆さん**（昭和14年生、男性、乙部、２０１２年1月17日取材）は、遠洋漁業の生活を「宮古市のマグロ漁船の会社に勤めて、平成19年に68歳で漁撈長を辞めた。漁撈長は漁場選定をして、細かな指示を出す仕事。ハワイ沖やオーストラリア沖によく行って、一旦漁に出ると1年のうち半年は戻らない。戻ってきたら1か月は休んで、また航海に行って、少

し休んで、また漁に出て、を繰り返していた。田老には1年に2か月もいないぐらいだった」と振り返る。

養殖漁業への転換

田老における遠洋漁業の衰退は、昭和40年代以降の安定的な収入が見込める養殖業の定着だけでなく、こうした長期的な不在による生活環境の厳しさにもあったのだろう。二百海里規制、減船時代のなか、沖合・遠洋漁業就業者は昭和50年代前半をピークに減少している。

昭和40年には小港・樫内で試験的に養殖ワカメが収穫されている。外洋に面する田老の場合は、筏を要するカキ・ホタテの養殖は向かないため、耐波性の高いワカメ・コンブの養殖を主とする経営体が増加している。ワカメ・コンブの養殖施設は延縄方式で、１００～２００㍍ほどの幹縄に枝縄に種付けを行って海中で養育させる。海面近くにワカメ、約20㍍の深さにコンブを付ける構造になっている。養殖といっても実際には付着先が縄であるだけで、海中の栄養分で生育するので、天然と変わらないものである。ワカメは原藻のまま漁協に出荷し、コンブは水洗い・カット・乾燥の工程を経て、干コンブの状態で漁協に納入する。ワカメに比べコンブの方が販売額はよいが、生産コストがかからないため、高齢または単身就業の場合はワカメが主になる。

養殖業は田老漁協内に11の養殖組合が地区ごとに組織されており、それぞれ養殖施設を所有し、養殖漁場の調整と決定、着工から販売までを管理している。漁業者側は、漁業組合に所属し、執行権が認められると養殖業を行うことができる。のちに塩蔵ワカメは「真崎わかめ」として田老の主力ブランドに成長していく。地先資源でもっとも収益が高いアワビは、現在でこそ生鮮出荷が主流だが、昭和30年代までは干鮑に加工して出荷していた。昭和55年からはアワビの稚貝を放流し、翌年からは稚貝中間育成施設が完成し、アワビの増殖事業が始まる。アワビは船上から箱眼鏡を用いて海中をのぞき、鈎で採捕する。こうした養殖業の展開や増殖事業と計画的な資源管理・地域ブランド化事業によって収益を確保し、厳しい遠洋漁業からの転換を図っている。

昭和46年からはラサ工業株式会社田老鉱業所の閉山を受けて、サケ稚魚の放流事業が始まり、初年度は30万匹が放流された。昭和48年には孵化場が完成した。サケ漁への設備投資が実を結び、次第に漁協が経営する定置網にサケが入るようになった。昭和51年には6・1万尾の大漁となった。さらに、昭和58年には35・7万尾4億4千万円、平成5年には50・9万尾7億円と、サケ事業は田老の漁業の主要な項目に成長していった。

東日本大震災を経て

東日本大震災では多くの組合員・港湾施設・漁業施設に甚大な被害を出した。組合員のうち48人が死亡し、すべての漁港の岸壁が破壊され、クレーンや倉庫・冷凍・加工施設も流失した。また地盤沈下も起きており、港に波が上がる状態が続いた。漁協が保有する定置網船も6隻のうち4隻が被災した。組合員が保有する漁船８８２隻が流出し、12億の損害が出た。その後の調査で81隻が残ったことが判明している。

震災後の漁業の動きを、漁協が毎月上旬に発行する『ＪＦたろうだより』で確認していきたい（表3）。平成23年4月には、共済事業のなかで漁獲共済としてワカメ・コンブを全損で請求し、5月中に限度額の8割が共済金として振込まれた。また同様に養殖施設についても5月中に共済価格相当額分が振込まれる予定となり、混乱のなかでも迅速に組合員の生活を補っている。6月には自家消費に限定した天然ワカメの採捕が行われていたが、船が不足しているため採取方法を磯刈りによるものと制限した。青年部は樫内に残った船を用いて共同採取し、漁協で加工している。天然ワカメのほかに天然コンブ・アワビ・ウニ・磯・タコなどが随時口開けがされる。しかし、全国的な漁船不足と、国の補助方針が定まらず、事前に着工すると「事前着工」とみなされ補助が下りないなど、船を確保するにも動きにくい状況であり、田老でも深刻な漁船不足になっていた。こうしたなかでも、アワビ漁などは船を乗り合い、採捕者には日当を出して、その売り上げを均等に組合員世帯に配分するなどの工夫がなされている。

表３　「JF たろうだより」掲載復興関連記事

発行年月	震災・復興に関する主な記事
平成23年4月	【漁獲共済】ワカメ・コンブを全損で請求。５月中に限度額の８割が共済金として振込まれる予定。 【養殖施設】全損で請求。５月中に共済価格相当額分が振込まれる予定。
平成23年6月	【天然ワカメ】天然ワカメの採捕が2日～8日。カマによる採取方法は磯刈のみ。 【販売】仮店舗営業再開。給油所の再開。
平成23年7月	【養殖施設】6月23日より樫内養殖組合から漁港内の瓦礫の撤去が始まる。 【寄贈】ヘルメット700個。 【調査】漁船等配備方針と保有漁船等調査
平成23年8月	【養殖施設】7月29日に樫内、31日に栃内・沢尻養殖組合、8月2日に青の滝・小港、3日に摂待・水沢の養殖組合がワカメの種付けを実施。
平成23年9月	【集会】平成23年度総会が2ヶ月遅れで終える。損益計画書、復興経営計画について報告および承認。
平成23年10月	【定置網】水揚金額9月末時点で前年同期比49％の実績。 【寄贈】民間基金「希望の烽火」よりフォークリフト2台、冷凍コンテナ5台が寄贈される。学校法人片桐学園より漁船3隻が寄贈され、共同利用船として使用する予定。
平成23年11月	【集会】第2回地区座談会でアワビ採捕・漁船の配分方法について協議（摂待地区集会所37名、グリーンピア三陸みやこ97名、青野滝集会所13名、樫内集会所19名、和野集会所19名、漁協３階会議室28名参加）。 【アワビ】11月4日、12月1日に口開けを予定。 【タコ】口開け。 【養殖コンブ】11月2日に養殖コンブ種苗の沖出しが行われる。 【定置網】赤島、佐賀部合わせて水揚昨年比8％増。5千443万円の実績。 【養殖施設】樫内2セット60台、栃内3セット73台、沢尻4セット91台の敷設が終了。真崎以南の養殖施設敷設完了となる。小港2セット53台、青野滝4セット87台、水沢1セット20台、摂待3セット55台が投入される予定。 【漁船】漁船（16尺）91隻を抽選により配布。
平成23年12月	【アワビ】1回目の口開けで2.5トンの実績。ただしアワビが極端に痩せている。1号品（活アワビ）15,500円、2号品（ヤセ・キズ）8,610円で入札される。 【サケ】速報　168,195kg（前年度比　－54.4％）、86,410千円（前年度比　－46.6％）。
平成24年1月	【磯もの】磯の口開けが1月24日から4月8日の間で18回を予定。
平成24年2月	【アワビ】共同採捕したアワビ水揚代金を組合員世帯を対象に均等配分。 【寄贈】三重水産協議会「中古漁船輸送プロジェクト」よりポリ玉1000個を寄贈される。
平成24年3月	【港湾】摂待・水沢・小堀内・小港のクレーンが完成。
平成24年4月	【養殖ワカメ】2年ぶりに養殖ワカメの収穫が始まる。 【港湾】樫内・田老のクレーンと照明施設が竣工。これにより組合内すべての漁港にクレーンと照明が配備される。製氷貯氷施設が完成。
平成24年5月	【養殖ワカメ】1,475トン（平成22年度比　－25.4％）、22,800千円（平成22年度比　＋13.7％）の実績。 【サケ】2年ぶりの放流会。
平成24年6月	【天然ワカメ】6月2日に2年ぶりとなる天然ワカメの口開け。177名の出漁による51トンの水揚げとなった。 【漁船】定置網の第21赤島丸（19トン）が完成。 【港湾】共同倉庫（採介藻60区画、漁船漁業用60区画）・共同乾燥場（田老24区画、小港3区画）が完成。 【販売】岩手大学の協力でネット販売を検討。 【田老大漁まつり】2年ぶりとなる田老大漁まつりが漁協の事務所前で開催される。
平成24年7月	【集会】平成24年度通常総会をグリーンピア三陸みやこ体育室で開催。決算・剰余金処分案が承認。 【天然ワカメ】6月5日の口開けで今年度の採捕が終了。
平成24年8月	【ウニ】7月27日に2年ぶりとなる口開け。 【漁船】第21赤島丸、2011年教訓七郎丸（3.7トン）の竣工式が行われる。
平成24年9月	【市場】9月1日に田老魚市場の再開。 【天然コンブ】9月1日に震災後初の口開け。
平成24年10月	【天然コンブ】9月中に14回の口開け。
平成24年11月	【天然コンブ】水揚げ40,960kgで岩手県一となる。共同乾燥場の完成が漁期に間に合ったため。
平成25年2月	【港湾】定置番屋と倉庫、船舶給油施設が完成。
平成25年3月	【港湾】青野滝漁港の漁船陸揚げ用ウインチが完成し、全ての漁港で荷揚げ施設が復旧したことになる。
平成25年4月	【サケ・ますふ化場】3月15日に「摂待川さけ・ますふ化場」が完成。1,550万匹のサケ稚魚を生産することが可能となる。
平成25年11月	【育成】専業漁家以外の子弟でも漁業を学び働ける場として銀河養殖漁業協業体の発足。3名が参加。
平成26年3月	【アワビ種苗生産施設】2月26日に摂待漁港地内に復旧・完成。年間120万個のアワビ稚貝を生産することが可能になる。 【ワカメ加工場】2月7日に田老漁港にワカメの一次加工処理施設が完成。
平成26年5月	【育成】休止していた特任制度を再開。
平成26年10月	【港湾】樫内・摂待漁港内の転石発破作業を実施。
平成27年3月	【ワカメ加工場】2月28日に真崎わかめの二次加工施設が完成。

養殖ワカメは平成23年7月下旬から8月上旬にかけて種付けが行われ、翌年4月には2年ぶりの収穫となった。平成26年3月に第一加工場、翌年3月には第二加工場が完成し、主力ブランド「真崎わかめ」の販売が本格化してゆく。定置網も10月時点で前年度比49％、翌年には定置網船第二十一赤島丸が完成して、徐々に震災前の水揚げ量に回復していく。クレーンや荷上場・倉庫などの港湾に付属する水産加工施設の復旧とともに、平成24年9月には市場も再開する（写真3）。

写真３　震災後初の初売り
2013/01/04　撮影：伊藤 純

サケ・マスのふ化事業やアワビ種苗生産施設といった大型の資源管理施設の再建も平成27年には一段落している。こうした設備の整備は生産量を上げるだけでなく、特に加工については女性の雇用の場を創出している。一方で震災以前から続く後継者不足が前景化したことも否めない。漁協参事・総務部長の**藤井充さん**（昭和27年生、男性）は「被災前の組合員はおよそ６７０人から６４０人。被災前の平均年齢は65歳。田老漁協地区外に家を建てる人が出てきて、組合員の資格がどうなるか、現時点では不明だ。現在の組合員は６１４名。組織は数が力になる。真崎わかめは数が減れば見向きもされなくなる」と危機感を抱いている。経営体数も震災前が94であったのに対し、平成26年度には70と減少傾向にある。復興過程における田老の漁業は、新規事業を立ち上げるような方針転換はせずに、豊富な海洋資源を活かした震災以前からの生産体制を目指し進んでいるといえよう。

8　田老の復興とその課題

新たな防潮堤建設

震災後、「防潮堤による油断だ」「防潮堤への過信」などと報じられ、防潮堤の是非について田老内外の人びとが議論を展開している。**田中和七さん**（前出、２０１４年４月22日取材）はこれまでの防潮堤と土地利用について次のように述べている。

昭和８年の津波のときに、防潮堤を青砂里まで直線で作る計画があった。だけど水門を作る技術もなかったから、「へ」の字型になった。だから、青砂里に住んでいる人たちは「田老の人たちは自分たちを見捨てたんだ」って、消防団とかを辞める人もいた。そんな時代があったけど、そういう変な壁は時間や時が解決してくれた。

野原にはもろこし畑・キビ畑とかがあって、水も涌いて雨が降るとすぐに水溜りになって洪水になった。そこは三陸鉄道が通ったときに出た石の捨場になって、わかめとか昆布を干すのにちょうどよい場所になった。そのうちに浜小屋ができて、漁をする人たちがそこに住むようになって、次第に住宅ができるようになった。１軒が２軒、２軒が６軒のように増えていたった。坪単価が３千円だったのが、坪１万円になった。そのうちに整地して住宅用に売り出された。宅地化が進んだのは昭和40年代半ばぐらいで、震災前は坪５万円ぐらいだった。昭和８年の津波が来なかった沢沿いにあった青砂里とか、乙部の山際で井戸水を汲んで生活していたような人たちが、水道も通る野原地区に降りてきた。結果的には３軒ぐらいを残してみんな下がってきてしまった。街の分家の人たちも入ってきた。浜をやっている人たちは重い船を上まで持ってきてというよりは、近くに住むほうが楽だったのもある。浜小屋といっても、仮眠室も応接室もあったりして、普通の家よりも良いところもあった。

このように振り返るのは田中さんのみではないが、野原地区はその名が示すように雑穀畑で道路より低地にある畑地であった（写真４）。それが、トンネル工事の土砂を利用した埋め立てと防潮堤建設によって宅地化が進んだ。表５は住民基本台帳をもとに作成した昭和34年から平成25年までの大平・上町・中町・下町・川向・乙部地区の世帯数

をまとめたものである。第1防潮堤に囲まれた上町・中町・下町・川向は被災前までは横ばいないし減少傾向であった。一方第2・3防潮堤と第1防潮堤に挟まれるように位置する乙部・大平地区は、昭和40年代半ばから急激に世帯数が増加している。これが埋め立てと防潮堤建設によって増加したとは言い切れないが、大きな要因であったのは数字を見る限り明らかであろう。昭和40年代には養殖ワカメ・コンブが始まり、漁業形態も遠洋漁業からワカメ・コンブを中心とした養殖業に移行していく過渡期でもあり、乾燥場として利用するのに適していたという事情もある。

宅地化と世帯数増加により昭和63年には乙部自治会が乙部1・乙部2自治会に分割、平成3年には大平地区も同様に分割しており、社会生活においても大きな変化となった。

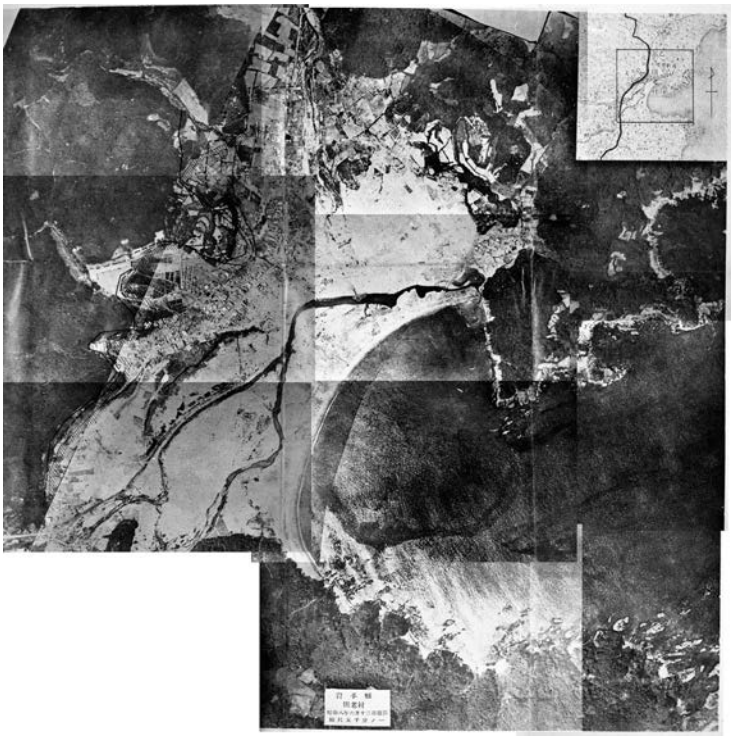


写真4　昭和8年航空写真
出典：内務大臣官房都市計画課編『三陸津波に因る被害都町村の復興計画報告書』(1934) より「第三十六圖　岩手縣　田老村　昭和八年六月十二日撮影　縮尺五千分ノ一

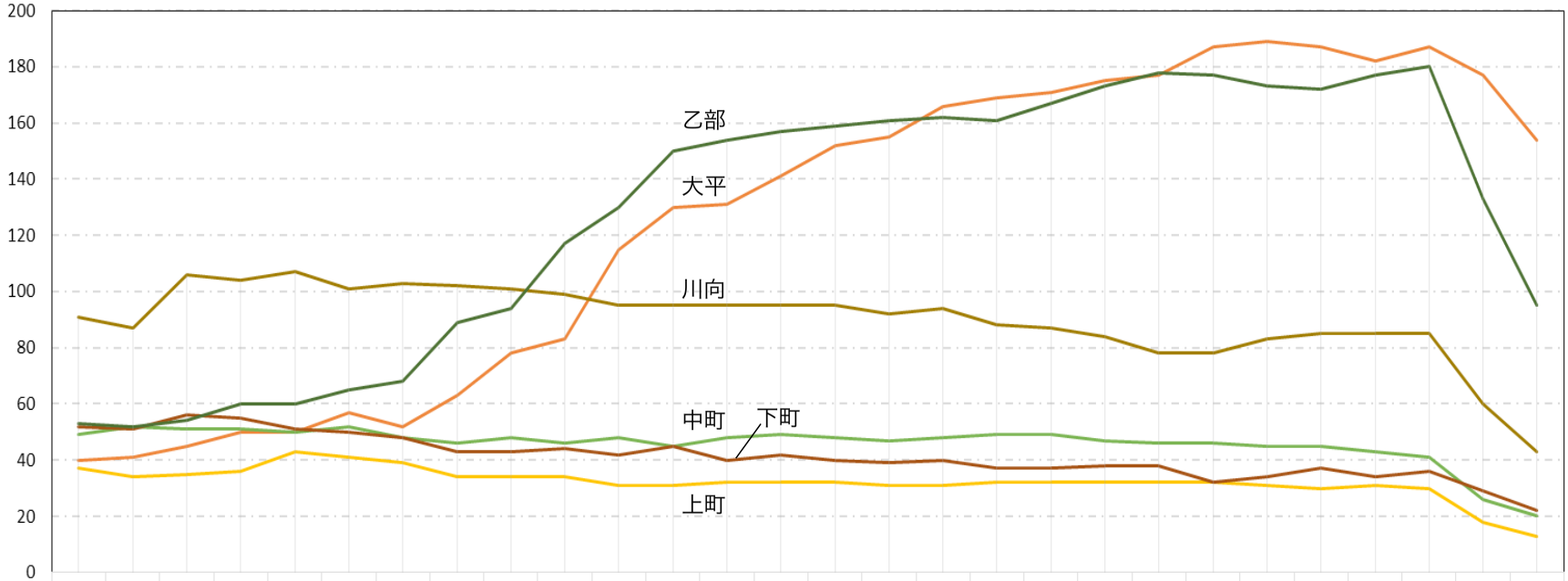
東日本大震災による津波を防ぎ切れなかった防潮堤は、さらに高くなり14・7メートルで施工される。その外側は条例により第1種区域での住宅の建築は不可となっており、漁港や水産加工施設が建設される。これまであったように、またこれからも大津波は再び田老を襲うであろう。防潮堤によって避難時間が確保できる一方で、一度それを超えるほどの波が来た場合、今回と同じように町が壊滅する可能性を常に含んでいる。その中で、人命と財産を守るための方策を臨海の町として考え続けていかなければならない。これまでの避難経験をみて明らかなように、津波から一刻も早く高いところへ逃げるという、シンプルかつ最も多くの人命を救うことになった基本原則を忘れないようにする必要があるだろう。

震災遺構としてのたろう観光ホテル

津波防災に関する意識向上が求められる中で、震災遺構が注目されている。震災遺構とは被災の痕跡を残す構造物・建築物で、次世代や経験を共有していない人びとに対して、震災の大きさを知らしめるものである。田老の場合は、早くからたろう観光ホテルを震災遺構として保存する動きがあった（写真5）。6階建てで、4階まで浸水し、1・2階は骨組みを残し流失した。宮古観光文化交流協会による「学ぶ防災」プロジェクトが開始され、平成24年4月から防潮堤と合わせた被災地ガイドが始まった（写真6）。ホテルでは6階から撮影された津波の映像を上映している。「学ぶ防災」による観光客は、平成25年度で3万人弱が来訪しており、岩手県内ではトップクラスである。ガイドの1人は「田老は他の町と違って、堤防やホテルのように震災の形が見えるので、震災の痕跡をわかりやすく伝えられる」と述べており、震災遺構を活かした観光と防災教育が期待されている。

たろう観光ホテルは平成25年11月には、市が申請を繰り返してきた国費保存が初めて認められ、震災遺構第1号として保存が決定した。国の交付金により初期保存工事が行われ、土地と建物買収費用と維持管理費は市が負担する。維持費は年間1千万円と試算され、入場料で

表５　世帯数の変遷（大平・上町・中町・下町・川向・乙部）住民基本台帳をもとに作成



	1959年	1961年	1963年	1965年	1967年	1969年	1971年	1973年	1975年	1977年	1979年	1981年	1983年	1985年	1987年	1989年	1991年	1993年	1995年	1997年	1999年	2001年	2003年	2005年	2007年	2009年	2011年	2013年
大平	40	41	45	50	50	57	52	63	78	83	115	130	131	141	152	155	166	169	171	175	177	187	189	187	182	187	177	154
上町	37	34	35	36	43	41	39	34	34	34	31	31	32	32	32	31	31	32	32	32	32	32	31	30	31	30	18	13
中町	49	52	51	51	50	52	48	46	48	46	48	45	48	49	48	47	48	49	49	47	46	46	45	45	43	41	26	20
下町	52	51	56	55	51	50	48	43	43	44	42	45	40	42	40	39	40	37	37	38	38	32	34	37	34	36	29	22
川向	91	87	106	104	107	101	103	102	101	99	95	95	95	95	95	92	94	88	87	84	78	78	83	85	85	85	60	43
乙部	53	52	54	60	60	65	68	89	94	117	130	150	154	157	159	161	162	161	167	173	178	177	173	172	177	180	133	95

第一防潮堤完成（58年）
第二防潮堤着工（62年）
第二防潮堤完成（65年）
第三防潮堤着工（73年）
第三防潮堤完成（78年）
東日本大震災（11年）

写真５　たろう観光ホテル

写真６　学ぶ防災

補填できるかが懸念されている（『宮古市議会だより』平成25年11月）。

人口の流出

長期化する仮設住宅での生活は、明らかに住民の不安と重圧を増大させている。仮設住宅の入居者の減少は、一人一人の自立再建を意味する。震災から４年が経過しようとするところで、グリーンピア敷地内の仮設住宅およそ１４０戸に空き家ができており、入居者もおよそ７００人に減少している。自立再建する人びとが増え、震災以前の生活が回復していく一方で、仮設住宅に入居する人びとにとっては、取り残されてしまうという孤独感を感じることにつながる。個人の生活再建と地域社会の再建のスピードの差が露呈しつつある。こうした仮設住宅での生活の長期化は、集団高台移転よりも自立再建を選択する人びとの増加に直結し、結果的に田老からの人口流出の一因となっている。

住民基本台帳（毎年10月１日現在）をもとに比較すると被災前の平成22年では１千５９３世帯から、平成25年には１千３４８世帯、人口は４千４６２から３千４８７と激減している。田老の場合、宮古市街地への通勤や宮古病院の利便性から、崎山の新興住宅地で家を構える人が多い。例えば、前出の**高屋敷吉蔵・トシ夫妻**は病院に通う関係で崎山の地を選んだ１人である。

（吉蔵さん）復興住宅も待っていられないし、病院に通わないといけないので、平成24年の12月30日に崎山に来た。

（トシさん）お父さんはさみしいさみしいっていうけどね。根っからの田老育ちだから。

（吉蔵さん）そこらへんに田老の人たちが集まる田老団地があるけどね。

（トシさん）うちは来たばっかりで、ここは崎鍬ヶ崎という地名だけれども、一緒に活動して、一緒にやっていこうと集会とか自治会に誘ってくれて、ありがたいと思っている。近所の人たちが「あとで紹介するねー」って声をかけてくれて、ありがたい。孫たちもいるけど、田老を離れたくないって「学校は田老に」ということが条件だった。学区を越えることを申請して現在は送り迎えをしている。

崎山のような新興住宅地はこうした自立再建を選択した人びとの受け皿となっている。しかし、それぞれ事情があるなかで田老を離れるためその複雑な心情を抱きながら、震災後の人びとの移動が行われている。

新たな住宅市街地の形成と高台移転

向山・荒谷間を通す国道45号線は嵩上げされて、一区画山側のルートに切り替えられた。市街地も２㍍の嵩上げ工事が行われ、１８０戸分の宅地が整備される。野球場の再建と道の駅たろうの移転が決定し、跡地利用も進んでいる。災害公営住宅への入居は平成27年11月から始まり、同年11月22日には宅地造成や災害公営住宅の完成を記念する「まちびらき」があった。災害公営住宅は鉄筋コンクリート造を市街地に、木造は高台で建築され、合わせて１１１戸が完成する予定である。また乙部の山林を切り崩し、海抜40～60㍍の高台に１６１区画の宅地が整備され、「三王団地」という名称に決定した。宅地整備面積約25㌶となっている。区画は希望する宅地面積に応じたグループに分かれ、希

望する宅地を選ぶことができるが、希望が重複した場合はくじ引きとなり、必ずしも希望する宅地を選択することができるわけではなかった。

今後、田老は三王団地と市街地に生活の中心が移行していくと予想される。今後の課題の一つとして、各神社の運営・管理の問題がある。例えば、もともと日枝神社は大平・小林・堺町・田中・田の沢・上町・中町・下町・川向の人びとが氏子となっていた。震災以後は氏子総代が中心となって辛うじて護っている状況であり、熊野神社や出羽神社も同様である。震災以前のコミュニティが解体され再編が進むなかで、地理的にも離れてしまう高台移転後はどのように運営がなされるのか。また、高台移転は生活の中心地が新たに形成されることになり、人口流出する一方で、町の面積は拡張し、交通弱者にとって生活不安は解消されたとはいえない。田老の生活と町づくりは、まだ始まったばかりといえる。

心の復興

写真7は平成25年1月の熊野神社の元旦祭の様子である。

熊野神社の氏子が集まり祭典が開かれ、その後直会となるが、震災以前の賑わいは取り戻せていない。先述のとおり、氏子組織は厳しい状態にあり、今後も不透明なところが多い。氏子総代の1人は「お礼を用意しても、氏子がバラバラのため配るのも大変。聞いて歩くのも売り歩くのも。住所を確認するのも大変だし、移転先の神さまと付き合うのかもしれないから今後は厳しい」と不安を口にする。初詣参拝者の数も減少している。日枝神社・熊野神社・出羽神社の合同祭「田老大漁まつり」の船引行事は、平成27年5月24日に復活したものの、震災以前の活気が取り戻せたとはいえない。

写真7　熊野神社元旦祭
2013/01/03　撮影：伊藤 純

神社の行事に限らず、個人の家の行事も長期化する仮設住宅での生活で中断している家が多い。正月行事をみてみると、震災以前では門口や玄関、釜戸に年縄を結び、歳徳神を迎えていたが、流出を免れた家々のほとんどでは行われていたものの、仮設住宅ではほとんど見られなかった。また、神棚には七福神や鯛や巾着といった縁起物や家業に関わる絵柄のお飾りを貼って1年を祈願していた。狭い仮設住宅では神棚を持たない家も多く、震災以前から行われていた文化伝統を当然のように継承できる環境ではない。

亡くなった人々への慰霊のかたちも多様化している。毎年3月11日には「NPO立ち上がるぞ宮古市田老」によるメモリアルイベントが行われ、多くの報道関係者が訪れている。震災の記憶は人それぞれであり、震災後、基礎だけになった住宅跡地の多くに行方不明者を偲ぶ花が供えられていた。3月11日には慰霊碑に手を合わせる人や、流されてしまった家の跡を訪れ、花を供える家族の姿が見かけられた。行方不明者の家族にとって、故人を偲ぶ場は墓や慰霊碑とは限らず、たとえ家屋がなくなっても一緒に過ごしたかつての家が記憶の場所なのかもしれない。その場も、土地を手放し、復興と跡地利用によって、以前の景観を思い出すこともできないほど様変わりしてく。住宅が建設され、生活が安定していく中で、文化の継承や死者・行方不明者に対する鎮魂のかたちを改めて考える時期が訪れている（写真8）。

写真8　人それぞれの鎮魂のかたち
2013/05/04　撮影：伊藤 純